

---

# 私のパズル

久芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私のパズル

### 【Nコード】

N6585H

### 【作者名】

久芳

### 【あらすじ】

私はパズルのピースを探していた。自分の名前ですら思い出せないけれど、ピースを集めなければいけないことだけは覚えていた。パズルが完成するにつれ、次第に、自分のことを思い出していく。私は……。

最初のピースは、カラスがくわえていた。

公園で羽を休めているところに近づくと、カラスは私の無言の訴えに気づいたのか、おとなしくピースを解放してくれた。

漆黒の翼をはばたかせて空に戻ってゆく姿を眺めながら、私はコンクリートの上に転がるピースを手にとる。それがパズルのどの部分かはなんとなくわかって、他にあわせるところがないのではめようがなかった。

私はピースを手のひらで包み、その冷たさにわけもなく泣きそうになった。でも涙の流し方ですら忘れていて、ただぼんやりと自分の手を見下ろすしかできなかった。

今の私にできるのは、パズルを集めること。

自分は何者なのか。今の自分にはそれですらわからなかった。

ただ頭の中にあるのは、「パズルを集めなきゃ」という思いだけだった。

自分は何者なのか。名前はなんというのか。どうしてこんなことになってしまったのか。教えてくれる人は誰もいなくて、私は自分の本能を信じるしかない。

パズルを集めればわかる。でも、そのピースがどこにあるのか、いったいいくつあるのか。それもよくわからない。完成図が自分でもうまくつかめていないから、頼れるのは本当に、自分の直感だけ

だった。

私はその第六感を頼りに、公園を出て、民家の間をてくてくと歩いていった。

その道中、見つけたピースはひとつ。今度は猫が持っていた。うかつに近寄れば警戒され逃げられるかと思っただけ、猫もまたカラスのように、私をしげしげと見つめてそつと地面にピースを置いてくれた。

今度のピースは、さっぱりなんの部分かわからなかった。パズルの一部分だということはわかるけど、どこにはめればいいのかかわらない。先ほどカラスからもらったピースには、絶対につながるない。

どうやら自分は、とても数の多いパズルをつくろうとしているらしい。それに内心うんざりしてピースを握り締め、私は手にした欠片がかすかにふるえていることに気づいた。

ふたつのピースは、お互いに呼び合っているようだった。地面にならべると、磁石のようにくっつきはしないものの、目にわかるかわからないか程度の小さな揺れで、共鳴しあっている。

もう一度手のひらに乗せてみると、ピースは他の仲間の気配を感じたようで、行き先を示しかすかに振動していた。私はそれを信じて先をすすんだ。

いくらか歩かないところで、ゴミ収集の看板を見つけた。今日は燃えるゴミの日のように、はちきれんばかりにばんばんになったゴミ袋が、看板の下にたくさん並んでいる。カラス避けにネットをかぶせているけれど、かしこいカラスはネットの隙間からゴミ袋を引きずり出し、よってたかかって中身をつつき散らかしていた。

それぞれの家庭で出たゴミの量は多く、道路には風にとばされたティッシュやビニール袋が散乱している。生ゴミの腐ったにおいが鼻をついた。

私がふらふらとゴミの山に近づくと、カラスは逃げるでもなくこちらに視線を向けて、私がひとり入れるスペースをあけてくれた。

ありがとう、とかけた声が聞こえたのかわからないけど、カラスが一羽、かあと鳴いた。

手が汚れるのもかまわずゴミを漁り、私はゴミ袋からたくさんピースを見つけた。先ほどのカラスや猫は、ここからピースを見つけたと思って間違いないだろう。こんなものを拾ってどうするのかとも思うけれど、それがヒントでたくさん集められたのだから、私は逆に感謝しなければならなかった。

カラスたちに混じって他のゴミ袋も漁り、私はピースを拾った。あいかわらずどれがどのものかわからないけど、手の平に乗せてみれば、仲間との再会が嬉しいのか共鳴が強くなっていた。

私がここにくるまでに、他のカラスや動物たちがピースを持ち去ってしまったかもしれない。けれどこれだけ見つけたのは大きな成果で、私はピースが隠される主な場所を知った気がした。

集めたピースのふるえを頼りに、私はまた他のピースを探す。ピースはまだ形を作るほど集まっていない。このパズルがなにをつくるのかはわかって、もうこういう形になるかはわからなかった。

私が次にたどり着いたのは近所のコンビニエンスストアで。共鳴が強いのは店内ではなく、外に設置されたゴミ箱だった。

カラスと家庭ごみを漁ったときにも思ったけれど、どうも他の人は私が堂々とゴミ箱をひっくり返していても気にならないらしい。声をかけられることもなければ、視線を感じることもない。なぜか私を見るのはカラスや猫といった動物ばかりだった。

予想通り、ゴミ箱の中の袋から、私はまたピースを見つけた。けれど先ほどよりは多くなく、あいかわらずこのものかもわからない。ピースが手のひらにおさまらなくなってきたので、私は集めたものを全部ビニール袋に入れて運ぶことにした。

ピースを集め終わると、コンビニを示していたほかのピースはおとなしくなる。そしてしばらく静まったかと思うと、また新たな仲間の気配を感じて道を示し始める。どうやら店内に興味はないらしい。

せっかく涼めると思ったのに。私はため息をこぼしながらも、ピースにしたがって足を運んだ。照りつける太陽は容赦なく私をあぶり、アスファルトからはいきれがたちのぼっている。早く集めないと、ピースが氷のように溶けてしまいそうで不安だった。

パズルができなければ、私は何も知らないままさまよわなければならない。道行く人に私は誰ですかと訊いたところで、訊かれた人も困って『はあ?』としか言えないだろう。

ピースが示す道は先ほどとは違う公園につながっていて、私は木陰ですこし休むことにした。喉が渴いても、ジュースを買うお金はない。公園の水のみ場には子供がいて、わたしが近づいても知らんぷりで飲み続けていた。

コンビニの例にならって公園のゴミ箱を探してみたけれど、そこにピースはなかった。隠すほうも、何度も同じ手を使うわけではないらしい。ピースはいぜん公園の中で共鳴しているけど、この広い中で見つけるのはなかなか至難の業だ。

足が疲れて、私は芝生の上に座り込む。ベンチはサラリーマンが寝ていて座れなかった。

なぜ自分はこんなことをしているんだろう。

そう思ったところで、答えを知っているのはパズルのほかにない。集めなければ私はわからないまま。けれど集めるのは難しい。

くじけそうになって、私は横になった。

子供たちの遊ぶにぎやかな声がする。サラリーマンのいびきが聞こえる。風にふかれて木々の枝が揺れ、葉っぱが私に降りそそぐ。梢から見上げた空はやけに青かった。

私が暑さに息をつくとき、ピースたちも同じなのかじつとりと汗ばんでいた。あまり暑いところには置かないほうがいい気がして、私はなるべく涼しそうなところにピースを隠す。袋を木の根のくぼみに置いて、ふと、視線を背の低い垣根にやった。

「あ」

こういうのを、灯台下暗しというのだろうか。ピースは垣根の下にこっそりと隠されていた。木の根で泥まみれになって、なかば埋められているようだった。

数はそんなに多くない。けれど、目についたものを拾うとピースは共鳴をやめた。そしてまた、次の場所を示し始める。もう公園に用はないらしい。

袋を抱えて立ち上がり、私は軽いめまいを覚えた。倒れるほどではなくて、膝をつけばすぐにおさまる。日射病にでもなったのかと思っただけ、どうやらそういうわけでもない。

私はあらためて立ち上がり、公園をぐるりと見まわした。変わったところは何もない、平凡ですこしだけ緑の多い公園だ。

ここに私は、前も来た気がした。そう思った自分に自分でおどろ

いた。

やっぱり、と呟いてみる。その声を聞いてくれる人はいなくて、すぐに風にさらわれていく。梢のざわめきのほうが大きかった。

ピースを集めると、私は記憶を取り戻していくらしい。これからもっと集めて、パズルを完成させれば、私は自分が何者なのかわかるのだろう。



ピースの共鳴を頼りに公園やコンビニなどをめぐり、私は手持ちの数を増やした。

けれどそれも、あらかた近所を探し回るとばたりとなくなってしまう。ピースも共鳴をやめ、おとなしく私に抱かれている。パズルのピースなのだから動かないのが当然なんだろうけど、静かにされては私が困る。

私はとりあえず、手持ちのピースをあわせてみることにした。一定のところに留まったほうがピースも仲間を探しやすいということを学んでいたので、そのまま道路に座った。

人通りはない。平日の午後だというのに、買い物に出かける主婦の姿ですら見ない。どうもここらへんのアパートに住んでいるのは、家に帰って寝るだけの労働者や学生ばかりのようだった。

はじめはまったくわからなかったピースも、ふたつみつっなら合わせるものが出てきた。ひとつ、大きくパーツができあがったものもあるけれど、それも単体では意味がない。やはりわけのわからないもののほうが多かった。

あらためてそれを袋に戻していると、静かだったピースたちが急にふるえだした。ピースの騒ぎが大きいのは、近くに仲間がいるから。でも、あたりには民家の壁しかない。

ピースの揺れが、他のピースが近づいてくるのを教えてくれる。でも、まわりに動いているものはない。空に鳥の姿はない。

近づき、近づき、そば来ると手の中の欠片がさらに強くふるえた。それでもピースの姿はなかった。

姿の见えないそれは、やがて私から遠ざかっていった。

「……一体、どこに？」

共鳴をやめたピースを手に、私は呆然と呟く。そして、ふと自分の足元を見つめた。

「地下？」

この熱したアスファルトの下。そこにあるのは、と考えればきつと上下水道。たしかにあの流れの速さから考えればそうかもしれないけど、私にコンクリートを突き破ってピースをとりだすなんて荒業はできない。

今のピースはあきらめるしかない。

共鳴をやめたピースが寂しそうで、私はごめんねと呟きながら立ち上がる。どうやらこれ以上ここで待っていても進展はないらしい。ピースが流れてきた道を頼りにすめば、またなにか手がかりがあるかもしれない。そう、この先には商店街がある。

どうやら私は、ここの地理を知っているらしい。

すこし歩くと、住宅街を抜けて商店街にたどり着いた。さびれがちの商店街は、近所に大きなショッピングセンターができたせいで、かつてあった賑わいが静まりつつあった。

学生が買い物に行くと安くしたりサービスしてくれたり、食料品を買うにも外食するにも優しさのあふれた商店街。そこに足を踏み入れると、早速共鳴が始まってゴミ箱から他のピースたちを見つけた。

それでもだいたい集め終えてしまえば、またピースはぴたりと静かになる。私はなんとかこの状況の打開策を見つけなければと、商店街を歩きながら頭を懸命に働かせた。

私はこの商店街を知っている。この地域になじみがある。じゃあ自分は誰なのか。

ふと、私は電気屋さんのテレビの前で立ち止まった。ちょうど、夕方のワイドショーがはじまった時間だった。画面の

中で、ピンクのカーディガンを着たアナウンサーが淡々と原稿を読み上げている。政治の話、芸能の話。不思議とその情報は私の頭も覚えていた。

『 帰宅途中に行方不明になったミクリヤユイさんですが、いまだに足取りがつかめていません。警察はミクリヤさんがアルバイトに行くとは家族に伝えて家を出たことから、家出と事件の両面で捜査を進めています……』

ミクリヤユイ。

画面に映る女子高生の写真を、私はウィンドウにはりついてまじまじと見つめた。

行方不明になっているのは私だった。

集めたピースはニユースをきっかけに、私に少しずつ記憶を与えてくれるようになった。

ミクリヤユイ。それが私の名前だ。

私は一週間ぐらい前に、バイトに行くために家を出た。行つてきますと家族に言つたのは覚えているけど、残念ながらその後の、失踪したという記憶はまだ戻っていない。

失踪前の記憶もまだ曖昧で、ぼんやりと霧がかかつて見えないところがたくさんある。わかることといえば、今まで私が歩いてきたところは、以前から歩きなれた道だということだった。

ゴミ箱でピースを拾ったコンビニ。あそこが私のアルバイト先。高校の同級生や、大学生の先輩たちと仲良くなって、時給が安いながらも毎日一生懸命働いていた。

バイトを通じて友達が増えて、さらに楽しくなった学校生活。ベツにクラスでいじめがあつたわけでもないし、バイトに行きたくないという理由で失踪するようにも思えない。自分で考えてみても、私が失踪するような要因は思い当たらない。

私は商店街を去って、またあてもなくさまよっていた。

ピースの共鳴はすっかりなくなつてしまっていた。ごくまれに騒ぐこともあるけど、見つけれないことのほうが多くて、そのうち消えてしまう。一体ピースはどこに隠されているんだろう。

ミクリヤユイという私は、普通の女子高生で。特別問題があるわけでもなく、ごくごく普通の女子高生で。進路に頭を悩ませテスト

の結果に肩を落としながらも、友達と仲良く遊んだりアルバイトに  
いそしんだりして、青春を謳歌していたはずだ。

歩きに歩いて、大学の近くに来た。来年、私もあの大学を受験す  
る予定だ。バイト先の先輩も、同じ大学に通って近くのアパートに  
住んでいた。

ゴミの収集看板を見つけるなり、再びピースがやかましく騒ぎ始  
めた。やはりピースはゴミの中に隠されていることのほうが多い。  
学生ばかりでマナーがなっていないという収集地区は、燃えるゴミ  
の回収が終わっても、ゴミ袋がいくつも無造作に捨てられていた。  
ピースを拾うと、まためまいで目の前が暗くなる。地面に膝をつ  
く私の脳裏に、ひとつの映像が流れた。

部屋の一室、真っ暗なパソコンの画面。フローリングに投げ出さ  
れた白い脚。

自分の部屋だろうか、と思って、まだそのあたりの記憶がないこ  
とを知る。本当にこのパズルは穴だらけで、与えてくれる記憶も断  
片的でつながりやしない。

集めたピースをまたあわせて、私はようやくひとつ、大きなパー  
ツを完成させた。誰もが目にしたことある、身近なもの。それはわ  
かるけど、はたしてこれは誰のだったろう。

できあがったパーツを手にもち、私は首をかしげる。どこかで見  
たことのある形。

形になったピースたちは、また私に失踪前のことを教えてくれた。  
一緒に遊びに行かない？ 新しい映画、面白そうだね。私を誘  
ってくれる優しい声。

ケータイのメール。かかってくる電話。夜遅くなると、送ってく  
れる人。途切れ途切れに、パズルの欠片はそれを教えてくれる。

「私……」

私は、失踪する前、誰かと約束していた。

そしてその人に、何か言おうとしていたのに。とても大事なこと  
を言うつもりだったのに。肝心なところをこのピースたちは教えて

くれない。悔しくて唇を噛んだ。

ユイちゃん。

突然、パーツが大きく振動した。私は驚いて取り落としてしまい、アスファルトの上でパーツがふるえている。まるで私になにかを伝えるように、今までにない強い共鳴だった。

集めたピース同士が、強く呼び合っている。

強いめまいがする。部屋の一室、パソコンの画面。投げ出された私の脚、夕暮れの暑い西日。

ユイちゃん。私を呼ぶ声。

甘く、囁くような声。ゆいちゃん、ゆいちゃん。耳元で囁かれて、誰かが私に覆いかぶさっている。

『ユイちゃんが好きなんだ』

声が蘇る。聞いたことのある声。

私はピースを抱えて立ち上がる。腕の中で、結合したパーツが私に教えてくれる。この声は誰のもの。そして私のこと。

「……先輩だ」

コンビニの、先輩。よく同じシフトにはいる、大学に通う先輩。

やさしくて、頼りがいがあつて、いろんなことを教えてくれる先輩。映画に行こう。ご飯を食べに行こう。勉強がわからないところは教えてあげるよ。

ユイちゃんのことを好きだ。

「先輩……」

彼が一人で住むアパートは、大学の近く。この近所。はたして場所はどこだっただろう。

頼りない私を叱責するように、ピースが強くふるえる。道を教えてあげると、他のピースを探するときのように、腕の中のふるえが私の行く道を教えてくれる。

私の行きたい道と、ピースが教えてくれる道は一緒なんだ。この先に、ピースがあつて、そして私の知りたいことがある。

私はなぜ失踪したのか。

誰かに　先輩に、はたして私は何を伝えたかったのか。

たどり着くまでの道。ピースを見つけた。

側溝のどぶをさらうと出てきた。人の家の庭にも埋まっていた。

まるでヘンゼルとグレーテル。転々と隠されたピースが、行く道を教えてくれる。

ユイちゃん、と私を呼ぶ声。甘く、粘つく声。それを聞いて、私は一体何を思っていたのだろう。

一番大事なピースがない。だから思い出せない。こまごまとしたピースに隠された記憶も必要だけど、幼いころの思い出なんてあとでもいい。今は、私の手がかりを集めなければならない。

核がないといけない。多くを知っているピースがないと意味がない。

共鳴を続けるピースに導かれながら、私は一步一步、先輩の家へと近づいてゆく。家に彼がいるかなんてわからない。でも今は、行くしかない。

アルバイトに行ってくるね。家族にそう告げた私。いつもならまっすぐ行くはずなのに、その日にかぎって違う道をすすんだ。

半そでのユニフォームは店についてから着る。ミクリヤと名前のついた私のネームが、カバンの中でケータイとぶつかってかちかちと音をたてる。

その日で、私はバイトを辞めるつもりだった。それはどうしても。そのピースはまだ私の手元がない。

ぐいぐいと身体をひっぱるピースの共鳴が弱まって、私は目的のアパートを見上げた。錆びついた自転車がいくつもとめられた砂利道。乱暴に停められた車。大学生の集まるアパートなんてどこもこんな感じだ。

先輩の部屋は二階。私は塗装の剥げた階段を上る。導かれるまま、部屋にたどり着く。

チャイムは鳴らさなかった。鍵がかかっているのも気にしなかった。私は部屋に入り、玄関にちらばった靴を踏んで短い廊下を渡った。ワンルームの小さな部屋。フローリングの上に寝転がる先輩の足がちらりと見える。

西日が差して、暑くなった室内。開け放たれたベランダの窓。パソコンの画面が、暗いまま室内でたたずんでいる。

私の腕から、袋からあふれて抱えきれなくなったピースがこぼれおちる。その、どしゃ、という音に気づいて先輩はこちらを向いた。  
「ひッ」

短く吸った呼吸が声帯をふるわせたらしい。先輩が私を見て目を丸くしていた。そうか、先輩には私のことが見えるらしい。

声をあげることもできずに硬直する先輩を尻目に、私は背を向けて台所に向かう。この部屋はピースに満ちていて、互いが呼び合う共鳴で部屋全体が振動しているようだった。

私は冷蔵庫の前で膝をつく。そしてためらいもなく開けた。先輩がやめると言おうとしたらしいひきつった声だけが、静まり返った室内でやけに響いた。

中を見て、私はやはりと呟いた。  
食料が少なく、みはらしのいい仕切り板の上に、行儀よく鎮座し



ているピース。私の記憶に欠かせない、核ともいえる大事な欠片。  
それは私の ミクリヤユイの、切断された生首だった。

「やめてくれ……」

先輩のかすれた声が聞こえた。けれど私は気にせず、冷蔵庫に手をつつこんで私の首を手にとった。

冷たい。そして、重い。きんきんに冷えたスイカを持っているような感じだった。けれどそのスイカには耳があり、鼻があり、髪がある。閉ざされたまぶたや鼻から流れた血は乾いてこびりつき、青ざめた顔を汚している。保存状態がよかったのか、他のパーツのように腐りかけてはいなかった。

私の膝に乗った袋から、ピースたちがこぼれていく。それは、細切れにされたミクリやユイの身体。カラスや猫がくわえていたのは指先や手首の一部で、集めたピースでかろうじて手首と思われるものを作ることができた。

集めたピースのほんの一部分で、どこのものかもわからない肉片や臓物のほうが圧倒的に多い。燃えるゴミとして処分されようとしていた生ゴミたちは、腐りかけたものが多く、半ば溶け出しているものもあった。それがフローリングの上にべちゃべちゃと落ちて、ひどい臭いが鼻をつく。

むき出しになった骨が、床に落ちるときにこつんと音をたてた。私は気にせず、核のピースを食い入るように見つめていた。

そうか、だから私のことが誰も見えなかったんだ。

耳たぶにふれた指先から、生首が持つ記憶が伝わってくる。触れた指先はこの上なく熱く、大量に押し寄せてくる情報にめまいがする。それでも取り落とすまいと、私はしっかりとピースを抱きしめ

た。

ピースが 私の首が教えてくれる。私がかような前のことを。私がかうしてこうなってしまったかを。

私はアルバイトを辞めるつもりだった。バイトは好きだったけど、続けることが精神的に苦痛だったからだ。

『ユイちゃん』

そう私に甘い声で囁く先輩。私は彼と恋人同士でもなんでもなかった。

先輩から一方的に言い寄られていた。しつこくメールが来て、電話が何度も鳴って、家の前で待ち伏せされた。同じシフトにはかりはいつて、しつこく遊びに誘われた。無理やりキスされそうになったことだってある。

たえられなくなつて、私はバイトを辞め、先輩との接点を断つことにした。でもバイトを辞めたところで先輩がおとなしくなるとも思えず、きつぱりと言う事に決めた。

けれど、一人で乗り込んだのはさすがにばかだった。

『ユイちゃんは僕のものだ！』

もともとストーカーの気があった人だ。私はあつという間に部屋に連れ込まれ、襲われそうになり、押し倒されて頭をしこたまどこかに打ちつけた。

どこに打ったのかはさっぱりわからない。私はそれで死んでしまったのだから。

先輩は私が死んだことで我に返つたらしく、罪に問われることを恐れて死体をどうするか考えた。

そして作り出したのが、私のパズルだ。

つい先日まで一緒に働いていた女の子の身体を切り刻み、こま切りにしてゴミと一緒に捨てた。人の身体なんてわからないぐらいばらばらにして、私は生ゴミになった。

捨てられるごみにも限度があつたのか、トイレに流したりもした。今も私のピースたちは、地下を流れ続けているのだらう。きつと力

ラスのお腹の中にだっているに違いない。

すこしずつ時間をかけて解体して、すこしずつ処分した。私は死んだ瞬間、想い人から、処分に困ったゴミになったようだった。

そして最後に残った私のピース　首だけが、処分に困って部屋に残されていた。

私が死の間際に見たものは、先輩に押し倒され、頭を打ちつける寸前の、自分の投げ出された脚だった。

「……先輩」

めまいのおちついた私が発した声は、生前出したことがないだろうと思われるほどに低く、ぞっとした声だった。

「私の身体は、どこ……？」

首から流れる血ですらなくなった自分の顔を抱き、私は腰を抜かして動けない先輩を振り向く。肩越しに振り返ったはずなのに、視界を邪魔するはずの肩は透き通ってふるえる先輩の膝を見せていた。私は幽霊だった。

集めていたのは自分の体だった。

できあがるはずの私の死体は、もう、散り散りになってしまっていて完成しない。

「ねえ、先輩？」

立ち上がると、膝の上に残っていたピースが散らばり、体液が流れ出た。皮膚に刻まれた毛穴はわかるけど、やはりどの部分の肉かはさっぱりわからなかった。

end

「ゆいちゃん……」

歩み寄ると、先輩は足が立たないながらも手で這って逃げようとする。もちろんそんなの無駄な抵抗で、私はあっさりと彼に追いつき、その眼前に生首をつきだしてみせた。

「ゆるしてくれ、ユイちゃん……」

「ゆるす？」

それは、今まで私に付きまとうていたことか。それともうつかり殺してしまったことか。あるいは、私の身体をばらばらにしてしまったことか。

不思議と、自分を殺した人を目の前にしても、憎しみなんて感じなかった。

パズルは完成しなかったものの、自分のことを知ることができた。そして事実を知ってしまった今、私にはもうやるべきことがないように思われる。

生きていたらあれがしたかった。これがしたかった。でも、もう遅い。今の私に、できることなんてかぎられる。

恐怖に焦るあまり、手をすべらせ床にはいつくばる先輩。私はただ、それをだまって見ていた。哀れみとか、そういうものを感じるわけでもない。ただ、見つめても彼に対する思いは無だった。それは生前となら変わりなかった。

ひいひいとなさけない泣き顔で許しを請う先輩の前に、私は自分の首を置く。パズルはもう完成しない。ならばもう、このピースに用はない。私はここを去ることにした。

玄関の戸が開く音がする。

私はミクリヤユイの失踪が、ようやく解決することを悟った。

行方不明になっていたミクリヤユイさんの遺体が、同じアル

バイト先の男子大学生のアパートで発見されました。警察はミクリヤさんがこの大学生にしつこく言い寄られていたことから捜査し、自宅でミクリヤさんの切断された頭部を発見。十九歳の少年を逮捕しました。その後の調べにより、少年は殺害したミクリヤさんの遺体を細かく切断し、生ゴミとして捨てたほか、トイレに流すなどして処分したと供述。警察は押収した配管を調べるなどして、ミクリヤさんの遺体を捜索中です……」

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6585h/>

---

私のパズル

2010年10月10日17時41分発行